

第二次世界大戦末期と戦後の
食用野草・食用雑草などの出版物公益財団法人
日本植物調節剤研究協会
技術顧問

森田 弘彦

本欄、「雑草のよもやま」で数回にわたって、江戸・明治時代の飢饉や戦時下の熱帯アジアにおいて、食料不足の状況下で人々が雑草や野生植物とかかわった逸話の一端を紹介した。雑草や野生植物に頼って飢えをしのぐ事態に日本全体が陥ったのは、間違いなく第二次世界大戦末期とその戦後の期間であったろう。もちろん基本は農産物の増産であって、当時の内閣情報局編輯になる「週報」には、「空地を食糧増産へ」の提唱(348号, 1943年6月16日)や、「空地はあげて食糧増産へ 一庭園や道路側にも作物を一」の記事(386号 1944年3月15日: 下記)も掲載された。

「・・・どこを利用するか: 空閑地といつても、草ぼうぼうとしてゐる空地ばかりをいふではありません。宅地、庭園、公園、運動場、学校校庭、工場敷地、工場周縁空地、空荒地、河川敷、堤防、林木伐採跡地、競馬場、ゴルフ場、道路側といふふうに、今までいろいろに使はれてゐたところでも、勝つための食糧増産に使はうといふのです。(後略)」

国民学校6年生の義夫君が、農事試験場に勤める伯父の助言や従兄の太郎君の協力のもとで自宅の庭で野菜作りに励む、という図書(毛利亮太郎「少国民理科の研究叢書 僕の農園研究」: 38)も1945年3月に刊行された。

北海道札幌市での空地への作付けと雑草や野生植物の利用の実態は、終戦から35年後に以下のように回想された。

「・・・それでも五月ともなれば、季節たがわず札幌にも桜の花が咲いた。(中略)この季節になればおおかたの人びとは、空き地があれば立地条件によって、公園といわず校庭といわず道路のふちからささやかな軒下に至るまで耕して菜園化し、おりから市の汚物処理の不円滑になやむ、自家糞尿を自ら汲み出して肥料とし、馬鈴薯、南瓜、豌豆、茄子、キュウリなどの種苗を求めて植えた。山野に行けばフキ、ウド、ワラビ、コゴミ、ゼンマイ、ミツバ、セリ、タランボなどつぎつぎ芽を出して、高級野草として賞味することが出来、そのほか毒になるトリカブトを除いて、道端にはタンポポからアカザ、ハコベ、フクベラ、アズキナ(筆者注: ニリンソウ、ユキギザ)、カンゾウ、イタドリ、ペンペン草からカボチャの葉まで、手当たりしだいに採取して質より量のビタミンの補給にあたり、ひそかにかなしい自然の恵みにさびしい感謝を捧げた。・・・(渡辺 茂 撃ちてしまの決戦下の食料、〔さっぽろ文庫14 昭和20年の記録〕1980 北海道新聞社)」

非常に多くの方々が当時の状況をご自身の体験として記録し、語り継いでこられたが、戦後生まれの筆者にはそうはいかない。ところが、札幌市での勤務時代に山菜の本を先輩と執筆した(山

本ほか「北海道山菜誌」1980)ことを契機に、さかのぼった時代における「山菜」に関わる資料などを収集しはじめた。すなわち、戦中から戦後にかけて刊行された、雑草や野生植物を含めた「非常食・戦時食・郷土食」に関する著作・資料を折に触れて古書店などで入手し、これまでに約40点に達した。図に示した38点のうち、発行年が空欄の資料(36, 37)を戦前と考えると28点が1944年までに、残りの9点が1945年10月以降に刊行された。1944年までの28点では、植物学者(6, 8, 10)、農学者(26)、医学者・教育者(1, 7, 19, 21)に軍関係者(2, 14, 18)が執筆者となり、また、多くが単行本として出版社から刊行されたものの、当時の国民動員体制の組織であった大政翼賛会や類似の組織(3, 4, 12, 15, 17)も発行に関わった。江戸時代以来の救荒植物に関する知見が最大限に活用されるが、ほぼそのままを収録した資料(19, 20, 23)もある。内容や収録された雑草・植物の種類はここに紹介しきれないほど多様・多種にのぼるが、「時局」を反映した切迫感や悲壮感を強調した記述がほとんど見られないことから、出版に際しての検閲などが厳しかったのかもしれない。

なお、1944年9月刊行の「郷土食と調理法(25)」は、終戦直後の45年11月に再び出版された。「まへがき」での「皇國興廢の決戦下において・・・」、「戦力を増強する・・・」や「あとながき」での「本書が戦力増強の一翼として・・・」は、再版ではそれぞれ「皇國自立の決定下において・・・」、「民生を安定する・・・」、「本書が国力涵養の一翼として・・・」に置き換えられた。

雑草や野生植物を含めた戦時下の食生活は二度と繰り返されてはならないが、これを「忘れない」意識も強く存在する。終戦から38年後には「食の安全と自給率が脅かされる今に、どう生かすか?」として「決戦生活工夫集(神奈川県食糧営團 1944年12月)」の中身が「非常時、何をたべるか 同時代社編集部 1983」として復刻され、また、57年後には「飽食の時代を踏まえて太平洋戦争下の食を知る」ために当時の婦人雑誌の記事をもとにした本(斎藤美奈子「戦時下のレシピ」2002)が出された。さらに、本欄でたびたび引用した、資源植物としての再認識の視点(佐合隆一「救荒雑草」2012)もある。多数の関連資料が国立国会図書館などにも収蔵されており、筆者の手元にある分は九牛の一毛にすぎない資料ではあるが、それはそれとして戦後生まれの者として「まず保存すること」に徹している。



図 第二次世界大戦末期から戦後に刊行された、雑草・野生植物の食用を含む資料の表紙・扉

No.	書名・資料名	著者	発行年・月・日	発行所	No.	書名・資料名	著者	発行年・月・日	発行所
1	節儉食料並に救荒食物	三宅 秀	1918.9	開發社	20	救荒食糧聚説	和田 齊	1943.12	人文閣
2	救荒百種	東方 籟	1935.3	篤農協会	21	野草と栄養	下田義人	1944.2	大雅堂
3	手軽に採集できる食用野草とその食べ方		1940.7	國民精神總動員樺太本部	22	野草とその調理	松野又五郎	1944.3	慶文堂書店
4	名古屋市附近に自生する食用野草 附薬用植物・有毒植物		1941.9	名古屋市役所・大政翼賛会名古屋支部	23	救荒食糧 かてもの	石井泰次郎・清水桂一	1944.4	泉書房
5	食用野生植物と其の調理法	岩本熊吉	1942.2	育生社弘道閣	24	食用木の芽	久保田稯	1944.5	西ヶ原刊行会
6	食用野生植物	坂庭清一郎	1942.2	主婦の友社	25	郷土食と調理法	全國學農聯盟	1944.9	學習社
7	原色野生食用植物圖説集	鍋島與市	1942.3	惇信堂	26	食用野草と薬草	末松直次	1944.11	大日本農會「農業 11月號」
8	山野菜食用記	原 秀雄	1942.5	北海道農會	27	若菜頌	柄内吉彦	1945.10	生活社
9	野草の食べ方		1942.5	北海道食料指導協会	28	食べられる野生植物草菌類	黒川多三郎	1945.10	戦災復興總本部
10	時局本草	梅村甚太郎	1942.6	正文館書店	29	食用野生植物便覧	福岡縣衛生課	1946.4	産業圖書株式会社
11	食べられる草木(上・下)	水野葉舟	1942.7	月明會出版部	30	原色圖解 食用野草採集案内	木部正行	1946.4	至誠書院
12	大東亞戦争ト草物語		1942.7	大日本草刈選手権大會	31	摘草百種(前編・中編・後編)	舘脇 操	1946.5-10	北方出版社
13	樺太の食用野草	福山惟吉・根津仙之助	1942.7	樺太文化振興會	32	食用野草	九里聡雄	1946	鳳文書林(八坂書房1973)
14	非常食糧の研究	東方 籟	1942.9	東洋書館	33	山菜と糧物	森友政勝	1947.2	朝倉書店
15	救荒植物ニ關スル參考資料		1943.6	大政翼賛會群馬縣支部	34	秋田地方の特用野生植物	佐藤邦彦	1948.2	秋田営林局
16	草の味	大泉 清	1943.7	大新社	35	有用野生植物圖説	宮澤文吾・田中長三郎	1948.6	養賢堂
17	郷土食のいろいろ	宍戸次郎	1943.8	大政翼賛會福島縣支部	36	本道食用野生植物と其調理法			北海道廳
18	食べられる野草	陸軍獸醫學校研究部(中村芳雄)	1943.11	毎日新聞社	37	北海道の食用野草と其の調理法(其一)			北海道食糧指導協會 北海道食糧研究所
19	農聖の食糧對策 石川理紀之助翁の實踐	兒玉庄太郎	1943.12	人文閣	38	小國民理科の研究叢書 僕の農園研究	毛利亮太郎	1945.3	研究社